

# 人間子規における文学とベースボール Shiki — His Literature and Baseball

依藤 道夫  
Michio YORIFUJI

Shiki Masaoka (1867-1902) was born in Matsuyama, Shikoku. He studied in Matsuyama and Tokyo. He became a famous modern Haiku reformer. His leadership gathered a great number of friends and followers, and made the “Shiki Mountains”. Shiki was very much interested in baseball which was brought from the United States. He was a good player of baseball and taught his friend and followers how to play it. He also enjoyed a baseball game with them all.

Shiki was a great reformer of modern Haiku and a great pioneer in the history of Japanese baseball. His personality was very strong, wide and warm.

## 1.

正岡子規は四国松山の生まれである。

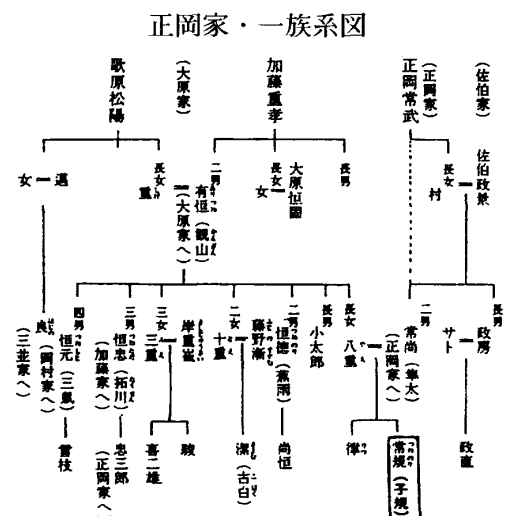
伊予の国「松山」は、慶長8年（1603）に松山城が戦国大名加藤嘉明によって勝山（132メートル）に築かれた時、その名がついた（『子規だより』VOL. 20-1。松山市立子規記念博物館刊）。勝山は石手川右岸に位置している。

子規（正岡常規）は、正岡家の次男として松山市の藤原町に生まれた。慶応3年（1867）のことで、幼名処之助と言った。通称は升<sup>のぼる</sup>であり、後年「のぼる」から「野球<sup>ノボール</sup>」としゃれたりしている。

子規の父常尚は14石3人扶持<sup>ぶち</sup>の松山藩士であり、母の八重は、儒学者大原観山の長女だった。観山は松山藩の藩校明教館の教授をつとめた人物である。成長した子規を訓育し、後押ししたのは、主としてこの母方に連なる人々だった。子規は、父が39歳で死去した明治5年（1872）に、5歳にして家を継いでいる。

幼少時の子規は、母方祖父の大原観山に読み書きを習うことから始めて、寺子屋の末広学校をへて、勝山学校に進んでいる。西南戦争が起こったのは子規10歳時の明治10年（1877）だった。

因みに、正岡家と一族の家系図は右の如くである。『伝記正岡子規』（松山市教育委員会編）



子規には妹が一人いて、律<sup>りつ</sup>といった。彼女は、兄子規が病気で伏せるようになってから

も、母八重とともに支え続けるのである。また、母八重の弟加藤恒忠（拓川）<sup>たくせん</sup>は、上京後の子規を助けることになる。

## 2.

13歳で松山中学に入った子規は、河東静溪<sup>せいけい</sup>に詩作を学んだ。静溪は、後年子規の弟子の一人となる碧梧桐の父である。

明治16年（1883）、松山中学を退学した子規は、母方のおじ加藤拓川を頼って上京した。

子規は、須田学舎、共立学舎をへて、翌明治17年9月、東京大学予備門に合格し、入学した。その入試に際して、子規は英語で苦勞し、隣席の受験者に教わったという。同級生の山田美妙は、英語力が抜群だった（『子規博だより』VOL.20-1）。

東大予備門は、後に第一高等中学校となる。徳川幕府の洋学教育の拠点開成所が、明治元年（1868）、開成学校に、そして明治10年東京大学となり、明治19年（1886）、東京帝国大学となった。

子規はこの頃、『筆まかせ』の執筆を始めている。東京ではおじ拓川の支援が得られた。拓川を通じて会った青森出身の『日本』新聞社長陸羯南<sup>くがかつなん</sup>は、やがて子規を同新聞社に入社させることになる。やがて子規を自宅の隣地に住ませたりもするようにさえなるのである。

愛媛の常盤会<sup>とまわかい</sup>の給費生となれた子規は、俳句を作るようになり、更に、新来のスポーツ「ベースボール」にも取り組む。俳句とベースボールは、子規の青年期の二大支柱と言ってもよい。

## 3.

21歳の明治21年（1888）、子規は第一高等中学校予科から本科に進み、常盤会寄宿舎に入って、後年日露戦争で名を成す秋山真之<sup>まきの</sup>を始めとする同郷の多くの若者たちと交わった。そして俳句、寄席、ベースボールなどに熱中した。子規の命を奪うことになる結核を発病するのもこの頃であり、咯血を見るようになった。翌年明治22年（1889）には、夏目漱石の友人となり、また夏期、松山帰省中に、河東碧梧桐らに得意のベースボールのやり方を教えている。陸羯南が既述の『日本』新聞を興したのもこの年のことである。明治23年（1890）の9月に東京帝国大学文科（哲学科）に入った子規は、句作のかたわら、熱中していたベースボールを題材として、小説『山吹の一枝』を著わした。日本最初のベースボール小説と言われる作品である。

明治25年（1892）6月、25歳の子規は、『日本』新聞に「獺祭書屋俳話」<sup>だつさいしょわく</sup>の連載を開始したが、これにより彼子規の俳句の革新が始まったわけである。獺祭書屋というのは、子規の居ということで、「獺祭」はカワウソが捕らえた魚を並べるのに因んで、詩文を作る時に参考書を広げちらかすことを意味している。

夏期松山に帰省の折、子規は漱石の訪問を受けた。日本新聞社に入社するため大学を退学することにした子規は、年末12月から新聞社に出ることになる。退学は翌年明治26年（1893）の春のことである。彼は東京根岸88番地に母及び妹と一緒に住むことになった。

子規の退学の理由は、自分自身の体調を考えたこと、家族を養わねばならないこと、俳句の革新の大仕事に専念したかったことなどであろう。彼は『日本』新聞に俳句欄を設け

た。東北旅行や羯南の隣地上根岸82番地への転居などをへたあと、子規は、『日本』新聞が政府から発刊停止処分をくらったのを受けて、編集長となって『小日本』を短期間発刊している（明治27年 [1894] 2月～7月）。

日清戦争が明治27年8月に勃発するが、翌年4月、子規は従軍記者となって中国の遼東半島金州に赴いた。そして5月、帰国の途次、船上で咯血し、そのまま神戸病院に入院した。次いで須磨保養院で養生したあと、夏には松山の愚陀仏庵で夏目漱石と同居した。この愚陀仏庵の建物は、現在も城山山麓の地に再建されて立っている。そこで子規が俳句を彼の松風会のメンバーたちに教えたのである。

子規が法隆寺を含む奈良をへて上京したのは、明治28年秋10月である。彼は『俳諧大要』を執筆しつつも、明治29年、終に脊椎カリエスの手術を受けた。以後、病状は予断を許さないものになってゆくのである。

ベースボールの精密な解説を『松羅玉液』<sup>しょうらぎよくえき</sup>に載せたのはこの頃、つまり明治29年のことである。漱石も熊本の第五高等学校へ移った。

明治30年（1897）1月、柳原極堂が松山で『ほととぎす』を創刊したが、子規もこれに助力している。12月には子規庵で蕪村忌（第一回）が開かれた。翌年2月、子規は「歌よみに与ふる書」を発表して、いよいよ本格的な俳句革新の大業を開始したが、やがて高浜虚子も東京で『ほととぎす』を継承することになった。

晩年の子規は、病気が進行して、寝たきりになる中、子規庵で歌会を催して、作歌や写生文の指導を行ない、水彩画も描いた。不自由で苦しい身を家族や門人たちに世話されながら、『墨汁一滴』（明治34年）、『仰臥漫録』（同年）、『病牀六尺』（明治35年）などを書き続けたが、終に力尽きる。明治35年（1902）9月19日早朝、35歳の若さで逝った。「絶筆3句」と言われるものが

へちまさい たん  
糸瓜咲て痰のつまりし佛かな

たんいっと  
痰一斗糸瓜の水も間に含ま（は）ず

お（を）ととい（ひ）のへちまの水も取らざりき

である。いかにも子規らしい句ばかりである。折しも友人漱石はロンドンに留学中だった。子規の壮絶な生涯は、以上のようにして終りを告げた。短く苦悩に満ちてもいたが、遅しく、若々しい情熱を燃やし尽くした一生でもあった。とりわけ俳句革新には、巨大な足跡を残し、いわゆる「子規山脈」と呼ばれる多勢の門人、友人たちが彼の偉業を継いだ。

そしてもう一つ、今日、第一回WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）大会で優勝し、世界のトップレベルの水準を誇って隆盛を極める我が国の野球の基<sup>もと</sup>を築いた子規の歴史的な功績が不久の輝きを放っていることも忘れてはならないことである（以上、『正岡子規の世界』[松山市立子規記念博物館]、『伝記正岡子規』[松山市教育委員会編]、『子規だより』諸号 [松山市立子規記念博物館] その他を参考にしている）。

### 3.

子規が子供の頃、母方の大原観山に学問を学んだことは既に述べた。また、母方のおじ加藤拓川は、子規を上京させ、かつ陸羯南に引き合わせるという重要な役割を演じた。そ

の拓川は、外交官や貴族院議員をつとめ、松山市長にもなっている。『日本』新聞の羯南は、子規を社員として招いたわけである。子規の母八重は観山の娘だったが、観山や弟拓川などとともに子規の人生に影響力を持った。八重は娘の律とともに、息子子規を献身的に看病した。

子規の従弟藤野右白<sup>こはく</sup>は、東京専門学校で学び、俳句にも子規と一緒に打ち込んだが、のち、自殺している。

石見津和野出身の陸軍軍医で作家の森鷗外は、日清戦争で出征し、戦地で従軍記者の子規と会ったりもしているが、子規の俳句友達でもあった。作家幸田露伴は、子規から小説『月の都』を見せられ、これを批判した。子規は作家を断念して、句作に向かうことになった。坪内逍遙の小説『当世書生気質』には子規が大きな影響を受けている。

子規の友人では日本海海戦の名参謀として活躍した秋山真之<sup>まねゆき</sup>や大作家になる夏目漱石が有名である。更に河東可全<sup>かぜん</sup>（読売新聞記者）及び碧梧桐（俳人）兄弟、高浜虚子（俳人、『ホトトギス』編集者）、長塚節<sup>たかし</sup>（俳人、作家。小説『土』の作者）、中村不折<sup>ふせつ</sup>（洋画家、新聞の挿絵の創始者）などがある。また、柳原極堂<sup>きよくどう</sup>（俳人、『ほととぎす』創刊者）や佐藤紅緑<sup>こうりく</sup>（『日本』新聞の社員。俳人、作家）、新海非風<sup>にいのみひふう</sup>（俳句をやり、子規と野球小説『山吹の一枝』を共同執筆した友人）、与謝野鉄幹<sup>てつかん</sup>（歌人。新詩会の結成者 [明治29年]）などもいた（『伝正岡子規』[松山市教育委員会編] その他）。

実にそうそうたる顔ぶれがそろっており、子規の交友の広さ、彼の活力の旺盛さ、人間的魅力の豊かさなどがしのばれるのである。子規はその吐く言葉は時として厳なるも、底には絶えず友愛の情を秘めていたのであろう。俳句の友や門下生が実に多い。

上記の人々の中には、当然のこととして、松山出身者が多い。秋山、河東(可)、河東(碧)、高浜、柳原、新海などみな子規の同郷人である。

むろん、夏目漱石は東京出身、中村もそうである。長塚は茨城、与謝野は京都、佐藤紅緑は陸羯南と同じく青森の出身だった。

#### 4.

子規の『七草集』は明治21年5月1日に完成している。場所は向島の長明寺の桜餅屋月香楼の2階に於てだった。『七草集』は「蘭の巻」「萩の巻」<sup>おみなえし</sup>「女郎花の巻」<sup>すずき</sup>「芒の巻」<sup>あさがお</sup>「薺の巻」<sup>くず</sup>「瞿麦の巻」<sup>なでしこ</sup>の7篇から成っている。漢詩漢文、和歌俳句、小説謡曲、考証などから成っている。河東碧梧桐は、この『七草集』について、「兎も角燃え上がらんとする叡智と、開き始めんとする情熱とが、制御しきれない奔放な勢いで、口をつき、筆に任して煥発したものだ。…当時の私は、嘗て耽讀した馬琴よりも、三馬や一九よりも、新たな熱と親しみを持って、其の草稿を抱きしめるのだった」（『子規の回想』）と評している（『子規博だより』VOL. 20-1）。

また、佐藤紅緑は、『子規翁』において、次のように述べている。

それから秋の夕暮れの頃である、書生部屋に灯を付けやうと思って居たら、玄関に案内を乞うものがある。薄暗い中に立っていたのは肩の幅が広く四角で丈けは余り高くない顔は白く平つたい方の人間である。余の案内も待たずのこのこ中に這入ろうとして居る。此の家に来る客の中で案内なしに這入るのは、青涯氏<sup>せいがい</sup>たつた一人であるの

に今又たこんな変挺へんていな人が一人殖よえたと驚いて、名前を聞いたら、正岡ですとハッキリ答へた。丁度向ひの住人余が教を乞ふべき人とは急に気が付かなかつた。兎も角も之れは子規翁に対する初対面である。

佐藤紅緑『子規翁』より

文中の青涯せいがいとは『日本』新聞の社員国府青涯のことである。紅緑は更にこうも記している。

当時の正岡君はどうであつたかといふに、極めて無頓着な粗暴な、構はぬ方で、始終懐手ばいぼくしゃで其の懐には売卜者の如く古書やら反古やらを食み出したまゝに詰め込んで居る。(中略)大食には中々の剛の者で、君の原稿紙の存する所に必らず焼芋、蜜柑、菓子を見るのである。金にかけては猶ほ無頓着である。月給は状袋に入れて渡すことになって居るが、其の状袋を受取れば其儘机の上に狼藉ろうぜきたる反古の中に混同せしめて些いささかも構はん。物を買つても剩錢じょうせんを勘定せぬ。だから硯箱の中にはいつでも銀貨や銅貨が這入て居る。余等は暑い時に氷が飲みたくなれば、いつでも君の硯箱の恩沢に預かるのである。

佐藤紅緑『子規翁』より

(以上『子規博だより』VOL. 23-2より)

「ハッキリ答へ」る、「無頓着な」様子はいかにも子規らしい。

夏目漱石は子規と同年だった(ともに慶応3年生まれ)。2人の交流は子規の生涯を通じて続いた。2人は明治17年9月、東大予備門に入った。同22年1月、ともに興味を抱いていた寄席すくなしのことから2人のつき合いが始まっている。漱石は『七草集』に動かされて「情優にして辞寡、清秀超脱紳韻をもって勝る」と述べ、初めて「漱石」と記した。子規はこの15日前に「子規」と号し始めたという。この結果、漱石は『木屑録』を書いた。漢詩漢文の房総旅行記である。子規もこれをほめ、英語のみならず漢詩漢文にも通じた漱石を「余は初めて一益友を得たり」と言い、また「吾兄の如きは千年に一人のみ」とも言っている。明治25年夏期、漱石は故郷の松山に帰省中の子規を訪ねている。Ideals漱石とRhetoric的子規は、却って馬が合ったのであろう(『正岡子規の世界』松山市立子規記念博物館)。

愚陀仏庵は今日松山城山麓に再建されて、名所の一つになっている。同庵は漱石が英語教師として愛媛県尋常中学校(現在の松山東高校)で教鞭を取った時、居住した家である。彼の下宿先である。折しも日清戦争で従軍記者だった子規が、病を得て帰省し、漱石とこの下宿で52日間同居した。ここで子規は多勢の友人、門弟たち(松風会)に近代俳句を指導した。漱石もこの松山にいた時、彼の生涯句数2,500句のうちの740句ほどを作っているのである(『子規博だより』VOL.21-2)。

2人の交友は、明治文壇の交遊録の中でも、特筆されるものであり、それは近代文学の夜明けを迎えた日本の明治文学史に新しい光を投げかけるものだったのである。

## 5.

### 雪ふりや棟の白猫声ばかり

これが子規の生涯で最初の作品と言われている。彼が友人の竹村<sup>たん</sup>鍛に書いた手紙にある。明治18年1月8日付けの手紙である。次いで『寒山落木』中の7句が見られる。従って前年明治17年頃には、子規は俳句に関心を持ち始めていたと言える。

明治20年、子規は友人勝田主計の紹介で三津の大原其戎に会った。子規は『筆まかせ』の中で其戎のことを「余が俳諧の師ハ実に先生を以てはじめとす 而して今に至るまで未だ他の師を得ず」と書いている。子規は句作の基本を其戎に学んだのである（『子規博だより』VOL.21-2, 同21-4）。

「俳句」の名付け親は子規である。

そもそも俳句ははじめの句という意味で発句と呼ばれていた。連歌の「5 7 5」（長句）＋「7 7」（短句）の初めの「5 7 5」を指す。子規はこの発句だけを独立させた文学形式を「俳句」と呼んだのである。こうして子規は近代俳句革新の道に邁進してゆくことになる。

子規は生涯で多くのペンネームを用いたが、前に述べた「<sup>だっさいしよおく</sup>獺祭書屋」がその一つである。自らをカワウソになぞらえた呼称である。「子規」もホトトギスに擬したものである。「鳴いて血を吐く」とか、八千八声鳴かねば鳴きやまぬ」とか言う鳥であり、口中が赤い。子規は歌うことと結核の病による咯血とを合わせてこれを号としたのである（『子規博だより』VOL.21-2）。明治22年5月に、子規は咯血し始めた。彼は子規と号して、時鳥（やはりホトトギスのこと）の題で数十句作ったと言われる。その他沢山のペンネームの中で、結局、子規が彼を表わす代表的なものに定着した。

## 6.

子規の名は「<sup>のぼる</sup>升」だが、彼はこれを「<sup>のぼる</sup>野球」としゃれた。「能球」「野暮流」などもある。日本のベースボール史の中で、子規は欠かせない大切な存在なのである。

河東碧梧桐は『子規の回想』（昭和19年）の中で、

「ベースボール」を訳して「野球」と書いたのは子規が蒿矢であったが、それは本名の「升」をもぢった「野球」（ノボール）の意味であった。

と記している。

実際のところ、ベースボールを初めて「野球」と訳したのは中馬<sup>ちゅうまかのえ</sup>庚である。即ち、彼の書いた「一高野球部史」（『交友会雑誌』[明治28年2月22日発行]）において初めて「野球」という訳語が用いられたのである。つまり子規の「野球」は彼の幼名「<sup>のぼる</sup>升」を表わした呼称だったのであり、ベースボールの直訳ではなかったのである。もっとも、中馬以前に、子規や友人たちは、ベースボールを「弄球」と訳してはいた（『子規博だより』VOL.21-2）。因みに、中馬庚は、第一高等中学校（元東京大学予備門）のベースボール選手だった人物

で、子規の後輩である。

野球の呼称については、越智二良氏も次のように記している。

松山では古くからベースボールを野球と訳したのは子規、子規が「野球」の名つけ親と「称され」ている。柳原極堂の『友人子規』にもハッキリと明記している。しかし、子規は明治29年ベースボールを解説し、訳語も多く残しているが、野球とはいっていない。

ベースボールにはじめて「野球」の名称をつけたのは中馬庚の『野球』という本(明治30年)であろうといわれている。(想像を逞しくすれば、中馬も一高の二塁手であったから、出版に際し先輩子規の教え、示唆をうけたかも知れぬ。)

それは別として、子規は明治23年作「雅号」の中に「野球」という号をしるしている。これはベースボールの訳語としてではなく、本名「升」に語呂を合わせたペンネームで、訓み方も恐らくヤキュウではなく「ノボール」であろうけれど、この雅号を選んだ根本動機は、当時熱愛したベースボールがあったことは十分推察される。すなわち、雅号野球にはベースボールの意味を含めたものと解して間違いない。

しかも、この字をわが国でいちばん早く作り、使ったのが子規である。だから、子規が野球の名つけ親と称されるわけで、「称される」にウエイトをおいて理解してほしい。

越智二良『子規こそわがいのち』(松山子規会刊)

子規がベースボールを始めたのは、明治16年～17年頃と考えられる。

ホレス・ウィルソンが日本に最初にベースボールを教えた。ウィルソンは、明治5年、第一学区第一番中学校(開成学校、次いで東京大学へと発展してゆく)の教師として学生たちにベースボールを教えた。鉄道局技師になる平岡熙は鉄道車両製造技術を学びにアメリカへ渡るが、その折ベースボールを知り、帰国後、この未知のスポーツを広く知らしめようと努力した。明治10年頃のことである。彼は新橋鉄道局につとめながら、新橋倶楽部チームを作った。

子規は、上京後、この新来のスポーツ、ベースボールに触れ、いたく気に入った。これに傾倒するに至る。柳原極堂は『友人子規』の中に子規のおば磯子(子規のおじ藤野漸の妻)の言葉を引用している。

平岡という鉄道に関した人が宅の主人の謡ひの友達であった因みで、其の平岡の子息さんと野球をやるようになったらしいのです。

子規は藤野家に寄宿していた(明治16年10月～17年9月)が、その頃平岡熙の新橋倶楽部に行ってベースボールを学んでいたのである。そして平岡の子息とベースボールをやったのである(『子規だより』Vol.21-2)。

子規は「常盤のやさ男隠し芸の見競」において自分の芸はボール、つまりベースボールだとしている。即ち、相撲番付にたとえて、自らを西之方前頭の一人としているのである。因みに、河東は東之方前頭として竿飛が巧みとし、新見は西之方前頭で、高飛ができる

している（『伝記正岡子規』松山市教育委員会編）。なお、<sup>ときわ</sup>常盤というのは愛媛の東京寄宿舍の常盤会寄宿舍のことである。

ともかく、我が国におけるベースボールの夜明けの時代に、このような人々の地道な努力の積み重ねがあった。そして子規もそうした人々の織り成す人間模様の中の一人だったわけである。

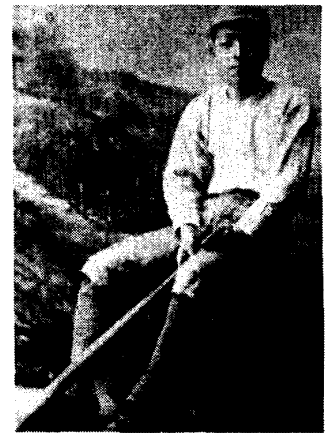
## 7.

子規の若かりし頃、日本の俳諧は旧態依然とした状態にあった。新しいことに積極的に取り組む、新しがり屋の子規は、逍遙などの影響で最初志した小説の挫折を通して、俳句の道に突き進み、その革新に乗り出していったのである。子規以前の俳句は「旧派俳句」、以後のは「新派俳句」もしくは「日本俳句」と言っている。

子規は写実の心を大切にした。写生を旨とした文学革新だった。子規はベースボールに魅せられ、仲間たちと練習や試合に打ち込んだ。そしてこの新来のスポーツを俳句や短歌、小説でも描こうとした（『正岡子規一人と作品』愛媛新聞社刊）。

子規のベースボールの俳句には、次のようなものがある。

- |                 |         |
|-----------------|---------|
| 春風やまりも投げたき草の原   | (明治23年) |
| まり投げて見たき広場や春の草  | (明治23年) |
| 恋知らぬ猫のふり也球あそび   | (明治23年) |
| 球うける極秘は風の柳かな    | (明治23年) |
| 若草や子供集まりて毬を打つ   | (明治29年) |
| 草茂みベースボールの道白し   | (明治29年) |
| 夏草やベースボールの人遠し   | (明治31年) |
| 生垣の外は枯野や球遊び     | (明治32年) |
| 蒲公英やボールコロゲテ通りケリ | (明治35年) |

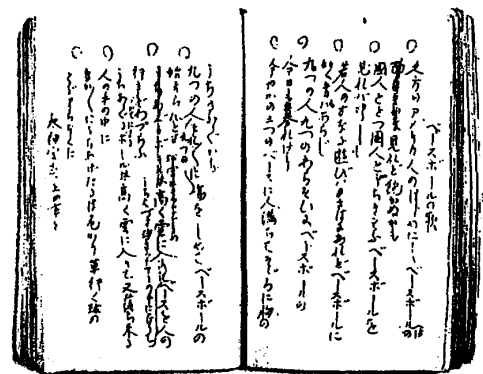


ユニホームを着た子規  
明治23年3月

（『正岡子規の世界』[松山市立子規記念博物館]より）

いずれの句も、さわやかではつらつとした、若々しい感性により歌い出されている。他方、彼のベースボールの和歌も味わい深い。

- 久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは  
見れど飽かぬかも  
国人ととつ国人とうちきそふベースボールを見  
ればゆゆしも  
若人のすなる遊びはさはにあれどベースボール  
に如く者はあらし  
九つの人九つのあらそひにベースボールの今日  
も暮れけり  
今やかの三つのベースに人満ちてそぞろに胸の  
うちさわぐかな  
九つの人九つの場をしめてベースボールの始ま



【竹の里歌】所収の「ベースボールの歌」  
(明治31年5月24日、新聞『日本』掲載)  
『正岡子規——人と作品』(愛媛新聞社刊)より



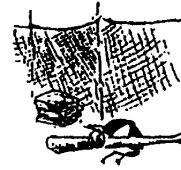
らんとす

うちはづす球キャッチャーの手に在りてベースを人の行きがてにする  
うちあぐるボールは高く雲に入りて又落ち来る人の手の中に  
なか々にうちあげたるは危かり草行く球のとまらなくに

(明治31年「竹の里歌」)

「久方のアメリカ人の…」では枕ことばの「久方の天<sup>あめ</sup>…」がかけてある。また、「うちはづす球キャッチャーの…」は、キャッチャーがボールを取って、塁上のランナーは行き場がない、という意味である。

どの俳句も和歌も、我が国で初めてベースボールを歌ったものであり、子規がいかにこのスポーツを愛し、それに夢中になっていたかを如実に表わしている。子規には、このすばらしい集団競技をこの国に植えつけようという使命感のようなものまで働いていたと思われる。



「うちはづす球キャッチャーの手に在りてベースを人の行きがてにする」  
「うちあぐるボールは高く雲に入りて又落ち来る人の手の中に」  
「なか々にうちあげたるは危かり草行く球のとまらなくに」  
この三句は、子規の「竹の里歌」に収められた。この三句は、子規の野球への関心をよく表している。特に「うちあぐるボールは高く雲に入りて又落ち来る人の手の中に」は、打球の軌道を巧みに表現している。また、「なか々にうちあげたるは危かり草行く球のとまらなくに」は、打球の危険性をユーモアをこめて表現している。

新海非風との合作野球小説『山吹の一枝』  
(明治23年頃)

既に述べたが、子規は同郷出身の友人新海非風<sup>にいのみひふう</sup>と『山吹の一枝』という合作ベースボール小説を書いた。これまた我が国初の野球小説である。

この山吹の一枝については、あとで改めて論じてみたい。

## 8.

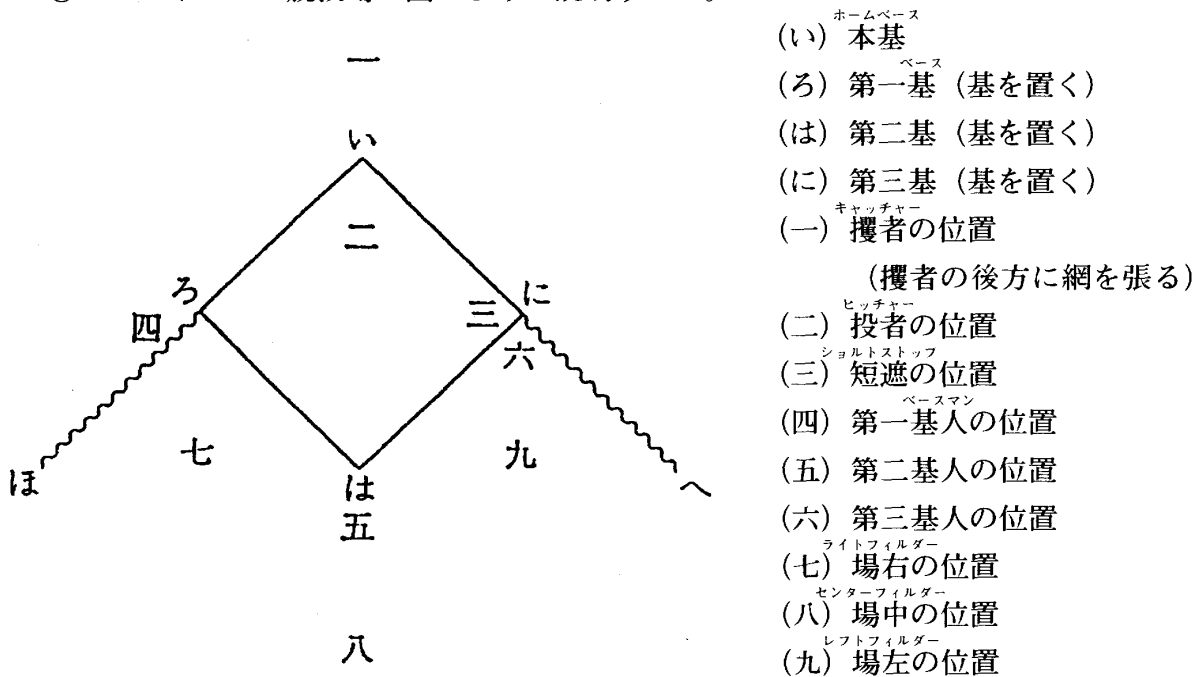
子規は『松羅玉液』<sup>しょうらぎよくえき</sup>(明治29年『日本』に連載開始)の中で野球をそのルールを含めて極めて精密、的確に詳述している。

○ベースボール に至りてはこれを行ふ者極めて少くこれを知る人の区域も甚だ狭かりしが近時第一高等学校と在横浜米人との間に仕合ありしより以来ベースボールといふ語は端なく世人の耳に入りたり。されどもベースボールの何たるやは殆どこれを知る人なかるべし。ベースボールは素と亜米利加合衆国の国技とも称すべきものにしてその遊技の国民一般に賞翫せらるるはあたかも我邦の相撲、西班牙の闘牛杯にも類せりとか聞きぬ。(米人のわれに負けたるをくやしがりて幾度も仕合を挑むは殆ど国辱とも思へばなるべし) この技の我邦に伝はりし来歴は詳かにこれを知らねどもあるいはいふ元新橋鉄道局技師(平岡熙といふ人か) 米国より帰りてこれを新橋鉄道局の職員間に伝へたるを始とすとかや。(明治十四、五年の頃にもあらん) それよりして元東京大学(予備門)へ伝はりしと聞けど如何や。また同時に工部大学校、駒場農学校へも伝はりたりと覚ゆ。東京大学予備門は後の第一高等中学校にして今の第一高等学校なり。明治十八、九年来の記憶に拠れば予備門または高等中学は時々工部大学、駒場農学と仕合ひたることあり。また新橋組と工部と仕合ひたることもありしか。その後青山英和学校も仕合に出掛けたることありしかど年代は忘れてたり。されば高等学校がベースボールにおける経歴は今日に至るまで十四、五年を費せりといへども(尤も生徒は常に交代しつつあるなり) ややその完備せるは廿三、四年以後なりとおぼし。これまで

は真の遊び半分といふ有様なりしがこの時よりやや真面目の技術となり技術の上に進歩と整頓とを現せり。少くとも形式の上において整頓し初めたり。即ち擲者が面と小手（擊剣に用ふる面と小手の如き者）を着けて直球を擲み投者が正投を学びて今まで九球なりし者を四球（あるいは六球なりしか）に改めたるが如きこれなり。次にその遊技法につきて多少説明する所あるべし。（七月十九日）

○ベースボールに要するものは凡そ千坪ばかりの平坦なる地面（芝生ならば善し）皮にて包みたる小球（直径二寸ばかりにして中は護謨、糸の類にて充実したるもの）投者が投げたる球を打つべき木の棒（長さ四尺ばかりにして先の方やや太く手にて持つ処やや細きもの）一尺四方ばかりの荒布にて座蒲団の如く拵へたる基三個本基及投者の位置に置くべき鉄板様の物一個づつ、擲者の後方に張りて球を遮るべき網（高さ一間半、幅二、三間位）競技者十八人（九人づつ敵味方に分るるもの）審判者一人、幹事一人（勝負を記すもの）等なり。

○ベースボールの競技場 図によりて説明すべし。



- (い) <sup>ホームベース</sup> 本基
- (ろ) <sup>ベース</sup> 第一基（基を置く）
- (は) <sup>ベース</sup> 第二基（基を置く）
- (に) <sup>ベース</sup> 第三基（基を置く）
- (一) <sup>キャッチャー</sup> 擲者の位置  
（擲者の後方に網を張る）
- (二) <sup>ヒッチャー</sup> 投者の位置
- (三) <sup>ショートストップ</sup> 短遮の位置
- (四) <sup>ベースマン</sup> 第一基人の位置
- (五) 第二基人の位置
- (六) 第三基人の位置
- (七) <sup>ライトフィルダー</sup> 場右の位置
- (八) <sup>センターフィルダー</sup> 場中の位置
- (九) <sup>レフトフィルダー</sup> 場左の位置

直線いほ及びいへ（実際には線なし、あるいは白灰にて引く事あり）は無限に延長せられたるものとし直角ほいへの内は無限大の競技場たるべし。但し実際は本基にて打者の打ちたる球の達する処即ち限界となる。いろはにはは正方形にして十五間四方なり。勝負は小勝負九度を重ねて完結する者にして小勝負一度とは甲組（九人の味方）が防禦の地に立つ事と乙組（即ち甲組の敵）が防禦の地に立つ事との二度の半勝負に分るるなり。防禦の地に立つ時は九人各その専務に従ひ一、二、三等の位置を取る。但しこの位置は勝負中多少動揺することあり。甲組競技場に立つ時は乙組は球を打つ者ら一、二人（四人を超えず）の外は儘く後方に控へをるなり。

○ベースボールの勝負 攻者（防禦者の敵）は一人づつ本基（い）より発して各基

(ろ、は、に)を通過し再び本基に帰るを務めとす、かくして帰りたる者を廻了といふ。ベースボールの勝敗は九勝負終りたる後ち、各組廻了の数の総計を比較し多き方を勝とするなり。例へば「八に対する二十三の勝」といふは乙組の廻了の数八甲組廻了の数二十三にして甲組の勝なりといふ意なり。されば競技者の任務を言へば攻者の地に立つ時はなるべく廻了の数を多からしめんとし、防者の地に立つ時はなるべく敵の廻了の数を少からしめんとするにあり。廻了といふは正方形を一周することなれどもその間には第一基第二基第三基等の関門あり各関門には番人(第一基は第一基人これを守る第二第三皆然り)あるを以て容易に通過すること能はざる也。走者(通過しつつある者)或る事情のもとに通過の権利を失ふを除外といふ。(普通に殺されるといふ)審判官除外と呼べば走者(または打者)は直ちに線外に出でて後方の控所に入らざるべからず。除外三人に及べばその半勝負は終るなり。故に攻者は除外三人に及ばざる内に多く廻了せんとし防者は廻了者を生ぜざる内に三人の除外を生ぜしめんとす。除外三人に及べば防者代りて攻者となり攻者代りて防者となる。此の如くして再び除外三人を生ずれば則ち第一小勝負終る。彼れ攻め此れ防ぎ各防ぐ事九度、攻むる事九度に及びて全勝負終る。

○ベースボールの球 ベースボールにはただ一個の球あるのみ。しかして球は常に防者の手にあり。この球こそこの遊戯の中心となる者にして球の行く処即ち遊戯の中心なり。球は常に動く故に遊戯の中心も常に動く。されば防者九人の目は瞬も球を離るるを許さず。打者走者も球を見ざるべからず。傍観者もまた球に注目せざれば終にその要領を得ざるべし。今尋常の場合を言へば球は投者の手にありてただ本基に向つて投ず。本基の側には必らず打者一人(攻者の一人)棒を持ちて立つ。投者の球正当の位置に来れりと思惟する時は(即ち球は本基の上を通過しかつ高さ肩より高からず膝より低くからざる時は)打者必ずこれを撃たざるべからず。棒球に触れて球は直角内に落ちたる時(これを正球といふ)打者は棒を捨てて第一基に向ひ一直線に走る。この時打者は走者となる。打者が走者となれば他の打者は直ちに本基の側に立つ。しかれども打者の打撃球に触れざる時は打者は依然として立ち、攪者は後(一)にありてその球を止めこれを投者に投げ返す。投者は幾度となく本基に向つて投ずべし。此の如くして一人の打者は三打撃を試むべし。第三打撃の直球(投者の手を離れていまだ土に触れざる球をいふ)棒と触れざる者攪者能くこれを攪し得ば打者は除外となるべし。攪者これを攪し能はざれば打者は走者となるの権利あり。打者の打撃したる球空に飛ぶ時(遠近に関せず)その球の地に触れざる前これを攪する時は(何人にてても可なり)その打者は除外となる。

(未完)

(七月二十三日)

○ベースボールの球(承前) 場中に一人の走者を生ずる時は球の任務は重大となる。もし走者同時に二人三人を生ずる時は更に任務重大となる。けだし走者の多き時は遊技いよいよ複雑となるにかかはらず球は終始ただ一個あるのみなればなり。今走者と球との関係を明かにせんに走者はただ一人敵陣の中を通過せんとするが如き者、球は敵の弾丸の如き者なり。走者は正方形(前回の図を参照すべし)の四辺を一周せんと

する者にして一步もこの線外に出づるを許さずしかしてこの線上において一たび敵の球に触るれば立どころに討ち死アウト（除外）を遂ぐべし。《ここに球に触るといふは防者の一人が手に球を持ちてその手を走者の身体の一部に触るることにして決して球を敵に投げつくることに非ず。もし投げたる球が走者に中れば死球といひて敵を殺さぬのみならずかへつて防者の損になるべし》されば走者がこの危険の中に身を投じて唯一の塁壁と頼むべきは第一第二第三の基なり。けだし走者の身体の一部この基ごふとん（坐蒲団の如き者）に触れる間は敵の球たとひ身の上に触るるも決して除外とならず。（この場合において基は鬼事のをかの如し）故に走者はなるべく球の自己に遠かる時を見て疾走して線を通すべし。例へば走者第一基にあり、これより第二基に到らんとするには投者が球を取て本基ストライカー（の打者）に向つて投ずるその瞬間を待ち合せ球手を離ると見る時走り出すなり。この時攪者はその球を取るや否や直ちに第二基に向つて投ずべく第二基人はその球を取りて走者に触れんと擬すべし。走者は匆卒そうそつの際にも常に球の運動に注目しかかる時直ちに進んで險を冒し第二基に入るか退いて第一基に帰るかを決断しこれを実行せざるべからず。第二基より第三基に移る時もまた然り。第三基より本基ホームベースに回る時もまた然り。但第三基は第二基よりも攪者に近く本基は第三基よりも攪者に近きを以て通過せんとするには次第に危険を増すべし。走者二人ある時は先に進みたる走者を先づ斃たおさんとすること防者が普通的手段なり。走者三人ある時はこれを満基フルベースといふ。（一基に走者一人以上留まることを許さず故に走者は三人を以て最多数とす）満基の時打者が走者となれば今までの走者は是非とも一基づつ進まざるべからず。

.....  
.....

この他特別なる場合における規定は一々これを列挙せざるべし。けだし一々これを列挙したりとも徒に混雑いたずらを加ふるのみなればなり。

○ベースボールの特色 競漕競馬競走の如きはその方法甚だ簡単にして勝敗は遅速の二に過ぎず。故に傍観者には興少し。球戲はその方法複雑にして変化多きを以て傍観者にも面白く感ぜらる。かつ所作の活撥にして生氣あるはこの遊技の特色なり、観者をして覚えぬく喝采せしむる事多し。但しこの遊びは遊技者に取りても傍観者に取りても多少の危険を免れず。傍観者は攪者キャッチャーの左右または後方にあるを好しとす。

ベースボールがいまだかつて詛語かかあらず、今ここに揚げたる詛語はわれの創意に係る。詛語妥當ならざるは自らこれを知るといへども匆卒そうそつの際改竄かいざんするに由なし。君子幸に正せいを賜たまへ。

のぼる  
升 附記

（七月二十七日）

『松羅玉液』（岩波書店）

野球の理論的解説として今日でも立派に通用する。極めて合理的で正確な内容である。なお、これはもとは新聞に載せたものである。

なお、この岩波文庫版の解説者加賀乙彦氏は、次のように評している。

時代を思わせるものにベースボールの克明な紹介文がある。明治29年には、野球はまだごく一部の人たちにしか知られていず、新聞にこういう文章が載ったという事実が感慨をもよおさせる。ベースボールについては野球の訳語はまだ当てられないが、直球、走者、打者など現代に通用している訳語の二、三が見られるのはほほえましい。

『松羅玉液』（岩波書店）

## 9.

子規は、日本のベースボール史の黎明期において、大いに意義深い貢献をした。これをたたえられて彼は、平成14年（2002）に野球殿堂入りを遂げた。東京ドームの野球博物館や四国松山の「ぼっちゃん球場」の記念館などには、このことを顕彰する展示物が見られる。

子規は、ベースボールを評して、『筆まかせ』（明治21年）で次のように述べている。

実際の戦争は危険多くして損失夥し　ベース、ボール程愉快にてみちたる戦争は他  
になかるべし

『筆まかせ』第1編「Base-Ball」

なお、同じ『筆まかせ』の第2編「力、物ほしをぬく」では、常磐会寄宿舎の子規たちが、ベースボールのじゃまになる物干しを引き抜いてしまったことが書かれている。

また、『筆まかせ』第4編「正岡升ベースボールに耽る」には、子規が宴会の場で興奮して盃をボールにしてキャッチボールをやり、床の間の貴重な「玻璃球」（水晶）を「大杯みじん粉として雪の如し」と砕いてしまったことが描かれている。子規の悪童ぶりを伝える文章だが、どこにいてもベースボールが頭から離れなかったのであろう。

更に、次に掲げる彼の文章は、自身のベースボールへの熱中ぶりをよく示している。これは明治21年頃を回想したものである。

ベースボールにのみ耽りてバット一本球一個を生命の如くに、思ひ居りし時なり

『日本人』（明治29年1月5日号）

（新年二十九度）

子規のベースボールへの傾倒ぶりには並々ならぬものがあつたわけであるが、金子紘也氏は、そうした子規を次のように論じている。

子規がベースボールに触れた頃の明治16年、大学予備門教師F.W.ストレンジが「OUTDOOR GAMES」なる英文の小冊子を出版した。内容は、日本に欧米の戸外スポーツ三四項目を紹介・解説したもので、当然ベースボールもあつた。この小冊子の「序文」の冒頭には「日本の学生は、戸外の運動場でするゲームをほとんど知らない。学生が運動場を活用していないのはゲームのやり方を知らないためである」との趣旨が述べられている。

子規にとって異文化から来た未知のスポーツであるベースボールは、新しい知識と体験であった。運動嫌いを自認していた子規自身や周辺の人々は意外に思ったであろうが、生来好奇心旺盛で、常に「新しさ」を求める子規がベースボールに深く傾倒したことは不思議ではなく、またそれを文学に応用したことは当然であるとさえ思える。

子規とベースボールのもつ意義とは、子規が切り開いた近代の「新しい」俳句、短歌、散文に、当時時代の最先端に位置した「新しい」スポーツであったベースボールを取り込み融合させ「文学」と「ベースボール」この両方を同時に普及・発展させたことにあると考えるのである。

『子規だより』VOL. 21-2

渡辺融<sup>ゆう</sup>氏も、子規を元祖「ボールマニア」として、こう述べている。

子規が野球功労者として野球殿堂入りすることになった。野球がまだベースボールと呼ばれていた草分けの時代、プレーと文章との両面で斯界の先達として彼が残した足跡の大きさからすれば遅きに失したかもしれないが、たいへん喜ばしいことである。

子規は、自著「啼<sup>ていけつ</sup>血始末」のなかで、「餓鬼になってもベースボールをやろうと思っています。云々…」と書くほどボールマニアだった。冥土で球界入りしてから一世紀、此岸での殿堂入りの報を聞いて彼の冥球界における活躍は一層拍車が掛かることだろう。

『子規だより』VOL. 21-1

## 10.

子規の和訳した野球用語には現在使用されているものもある。

松山市教育委員会編『伝記正岡子規』には子規の訳語と今日使われている訳語の比較対照表が記されている。

原 語	子規の訳語	現在の訳語	原 語	子規の訳語	現在の訳語
ピッチャー	投 <sup>う</sup> 者	投手	バッター	打 <sup>だ</sup> 者	打者
キャッチャー	攪 <sup>か</sup> 者	捕手	ランナー	走 <sup>そう</sup> 者	走者
ファースト	第一 <sup>だいいち</sup> 基人	一塁手	フォアボール	四 <sup>よん</sup> 球	四球
セカンド	第二 <sup>だいに</sup> 基人	二塁手	デッドボール	死 <sup>し</sup> 球	死球
サード	第三 <sup>だيسان</sup> 基人	三塁手	フライボール	飛 <sup>ひ</sup> 球	飛球
ショート	短 <sup>たん</sup> 遮 <sup>し</sup>	遊撃手	ダイレクトボール	直 <sup>ちよっ</sup> 球	直球
レフト	場 <sup>じやう</sup> 左 <sup>さ</sup>	左翼手	ホームベース	本 <sup>ほん</sup> 基	本塁
センター	場 <sup>じやう</sup> 中 <sup>ちゆう</sup>	中堅手	フルベース	満 <sup>まん</sup> 基	満塁
ライト	場 <sup>じやう</sup> 右 <sup>ゆう</sup>	右翼手			

子規の訳語と現在の訳語の対比表。(松山市教育委員会編『伝記正岡子規』)

子規は、この他にも、インングのことを「小勝負」と言っている。現在はむろん「回」

と言う。ともかく、こうした訳語の件を考えても、子規の先達ぶりがよく分かる。

子規は、しばしば仲間たちとベースボールを楽しんだが、明治23年3月21日午後上野公園の空地で「球戯」を「興行」した。その「番付」は次のようであった（『筆まかせ』）。

白	
勝田	C. ○…○…1 <sup>st</sup> …1 <sup>st</sup>
佃	P. ○…1 <sup>st</sup> …○
渡部	S. 1 <sup>st</sup> …×…Fo
吉田	1 <sup>st</sup> S…×…○
土居	2 <sup>d</sup> 1 <sup>st</sup> …×…S
河東	3 <sup>rd</sup> …1 <sup>st</sup> …S…×
伊藤	R. …○…×…1 <sup>st</sup>
山崎	Ce. …1 <sup>st</sup> …1 <sup>st</sup> …×
山内	L. …×…×…S
横山	…○…○…×
赤	
正岡	C. ○…○…S…○…Fo…Fo
竹村	P. ○…○…Fo…○…○…Fo
寒川	S. S…○…○…○…○…1 <sup>st</sup>
小崎	1 <sup>st</sup> Fo…S…○…○…○…○
高市	2 <sup>d</sup> ×…×…×…×…S…1 <sup>st</sup>
五百木	3 <sup>rd</sup> …×…1 <sup>st</sup> …S…S…S
大原	R. …1 <sup>st</sup> …×…Fo…Fo…×
山田	Ce. …○…○…○…○…○…○
新海	L. …×…×…○…○…S

子規『筆まかせ』

白組と赤組で紅白戦をしており、「正岡」が子規である。なお、この上野における試合は、題材として小説『山吹の一枝』でも活用されている。

ちゃめっ気の多い子規は、「明治23年3月常盤ベースボール番付私見」として、常磐会寄宿舎のベースボール仲間たちをここでも相撲に見立てて東西に分け、ランク付けして一覧表にしている。

『伝記正岡子規』  
（松山市教育委員会編）

見私附番ルースーベ盤常月三年三廿治明									
方之西					方之東				
前頭	前頭	小結	関脇	大関	前頭	前頭	小結	関脇	大関
土居菊次郎	渡部正綱	白石久貫	佃一豫	竹村鍛	河東銓	久松定靖	寒川正一	吉田匡	勝田主計
方之西					方之東				
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
新海正行	大原米太郎	横山正脩	山崎種美	山内正	相原栄三郎	高市直養	伊藤泰	戒田秀澄	五百木良三

いかなる時でも、病気が重くなってからでさえも、子規はいつもこうした遊び心を忘れることはなかった。これも子規の人的魅力の一つであり、多勢の友人たち、弟子たちを周囲に引き寄せる所以でもあった。

## 11.

子規は、明治35年（1902）9月19日午前1時に、東京の根岸の自宅「子規庵」で死去した。まだ35歳の若さだった。前日、苦しい中で辞世を残し、一旦眠り、夕方目覚める。モルヒネを打ち、また眠ったあと、午後8時頃目覚め、妹律に「誰々が来ておいでるぞな」と尋ね、苦しうに昏睡状態に入り、それが最後となったという。母八重、律、虚子らに見守られながらの死だった。遺体は田畑の大竜寺に埋葬された。子規の命日は糸瓜忌、<sup>へちまき</sup>獺祭忌などと言う。墓誌銘には、生前の子規が河東銓に送った一文が刻まれている。

正岡常規又ノ名ハ處之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ獺祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人伊予松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼太松山藩御馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養ハル日本新聞社員タリ明治三十〇年〇月〇日没ス享年三十〇月給四十円

「獺祭書屋主人」とは、既述の通り、カワウソが魚を並べ、ちらかすのに自らをなぞらえたものであり、「竹の里人」は彼の歌人としての号である（『子規だより』VOL. 20-4。『伝記正岡子規』）。

## 12.

『山吹の一枝』（明治23年 [1890]）は日本最初のベースボール小説である。子規と友人の<sup>にいのみ</sup>新海非風の合（共）作である。

大体、子規は小説に関心を持っていた。既に述べた通り、坪内逍遙（1859-1935）の小説『当世書生気質』（明治18年 [1885]）などに強い影響を受けていた。逍遙は西欧文学の影響の下で新時代の文学改良運動に取り組んでいた。子規も新文学への革新の志を持っていたのであった。

子規の小説観は、次のようなものである。

○小説 文学者として小説を読めば世に小説ほどつまらぬものはあらず。まず<sup>へきとう</sup>劈頭より文章がたるみたり言葉が拙<sup>つたな</sup>しとそれにのみ気を取られ、ようよう二回、三回と読みさしてから巻中の人物となじみたる後はまたこの<sup>しよぎよう</sup>所行がこの人に似あわしからずこの趣向がここの<sup>あじわ</sup>味を殺ぎ去りたりなどといささかなる疵<sup>きず</sup>さえ眼にさわって、巻を掩うて後、さてこれは面白かりきと思うほどのもの<sup>すくな</sup>少し。まして現世の人ことに顔まで知りあいたる中などには嫉妬<sup>しつと</sup>ということもあるべし。吾れ従来小説が好きながら小説を読むことは<sup>まれ</sup>稀なり。大方ははじめの一行を読み試みて唾<sup>つば</sup>を吐く、さらば<sup>はんまい</sup>半枚ばかり読みてその本を<sup>なげう</sup>抛たざることなし。それはあまりに気の強き人かなと側より笑われ自らも笑い居たるを、人というものは変てこなるものかな、ふさぎ<sup>がち</sup>勝に吐息つきあえぬ今日この頃何とはなしに小説を読めば身のうさくさは忘れはててさてもこれほど面白きものはなし。巻中<sup>あん</sup>暗に吾とおぼしき人あり、吾の相手とおぼしき人あり。読めば読



むほどよそ事とは覺えず独りほほ笑み独り気をもむおかしさよ。読み終りて悪きくだり無理なる趣向なきにもあらず、されど面白きところのみ心にとまりて忘れられず。小説はたしかに薬よりもききめ多し。あれこれと読みもて行けばここに一物あり。

『松羅玉液』

「世に小説ほどつまらぬものはあらず」と言いながら「薬よりもききめ多し」とか「ここに一物あり」などとも言っている。

子規は小説を志して、次のような諸作品を立て続けに書いている。それらは『龍門』、『銀世界』（明治23年執筆）、『山吹の一枝』（明治23年）、『月の都』（明治24年執筆。明治27年『小日本』に連載）、『一日物語』、『当世媛鏡』、『月見草』、『花枕』（明治30年雑誌『新小説』に掲載）、『曼珠沙華』、そして『我が病』などである。いずれも中～短篇である。

このうち『月の都』を幸田露伴に見せた。露伴の評はかんばしいものではなく、結局、子規は、

僕ハ小説家トナルヲ欲セズ詩人トナランコトヲ欲ス

と書いている（明治25年5月4日付けの高浜虚子あて書簡）。句作の道に進むことに決するのである。

『山吹の一枝』は、子規が奇数章を書き、友人の新海非風が偶数章を記している。ベースボールを素材として用いた恋愛小説である。

新海非風（1870—1901）は、本名正行で、松山の生まれである。上京して常磐会寄宿舎で子規と同室だった。一旦は陸軍士官学校に入る。俳句にもすぐれていた。が、結核病に侵されたこともあって退学となる。すさんだ生活を送るようになり、子規門を離れた。新吉原の遊女を妻にしたりもしたが、32歳の時、京都上京区若松町の裏町で死亡したという。

非風はまた、高浜虚子の小説『俳諧師』に五十嵐十風として描かれている。

『山吹の一枝』は、伊予国の豪家に生まれた紀尾井三郎の物語である。三郎が大阪の医学校で修業し、高田医師のもとで助手として働いていた時、山西という大阪官吏の家にその家の娘の診察に呼ばれ、これが縁で同家に出入りするようになる。が、三郎は明治22年東京に出てくる。三郎は、常磐会寄宿舎をモデルにしたと考えられる同郷人のみの下宿屋に住んで、仲間たちとベースボールに熱中することになるのである。みながこのベースボールに耽ったので、他の遊戯、即ち鉄棒、高飛、棹飛、幅飛などは次第に衰えていったと言っている。

此ベースボールといふはいと活撥なる遊びにて殊に熟練を要するものから初めのうちは面白く思はねども少し手に入る様になりてボールを受けることが十中七八はできるといふに至ては急に熱心の度を増しそれより上手になればなる程いよいよ寝食を忘れてこれに耽ること實にわき目より見れば不思議とやいはん奇妙とやいはん。熱心なる人を見て初め笑ひしともがらも、やうやうに誘はれて自ら其域に至る 而して其時にはたゞ面白味といふ外は何事も知らざる也

『山吹の一枝』第7回 投球会 花ぬす人 (=子規) 稿  
(『子規全集』第13巻 [講談社] より)

結局、上野の広場でベースボール興業をしようということになる。晴天の日曜日、上野公園の博物館横広場で黒山の人だかりの中、興業試合が行なわれた。この時、三郎の打ったボールが無残にも見物人の中の美人に当たり、大わらわとなる。この美人こそ大阪から出て来た山西家の令嬢増子だったのである。

やがて三郎は柳橋の芸者小松の家に入りびたり、そこへ増子が押しかけて言い争いになったりする波乱もある。三郎の下宿が火事騒ぎになったりもする。若い男女の物語を新来のスポーツ、ベースボールと絡ませて描いた佳作である。深味のある作品ではないが、口語的表現を生かした、しゃれた会話文などには特徴がある。主人公紀尾井三郎のモデルは、子規の友人五百木飄亭<sup>いおきひょうてい</sup> (明治3年 [1870] 生まれ) だという。飄亭も松山出身で、本名は良三である。松山医学校出である。上京後、常磐会寄宿舎に住んで、子規たちと俳句やベースボールをやった。彼は日清戦争に看護長として従軍し、新聞『日本』に従軍記事も送った。陸羯南と『日本』新聞で活躍し、編集長もつとめている。彼は政治にも関心を示した (『正岡子規』愛媛新聞社刊)。

飄亭はかなり活動的な人物だったように思える。

ともあれ、『山吹の一枝』は、我が国初の野球小説として、その出来栄えはともかく、歴史的な意義を持つものと言わねばなるまい。子規らしく大まじめの中にどこかおどけたところ、ユーモアが感じられる作品である。

『筆まかせ』には、たわむれの言葉遊びが載っている。

きょうボールを打とうと思ったのに、これでは雨天ねえ

オイ、ボールを打つなら、たまにはいいのをよこしてもいいじゃ、アアこんな強いのはたまらない。

などである。前者はボールを「打とう」と「雨天」をかけている。また後者では、ボールを「たま」にはと「たま」らないにかけて、おどけている。子規は大谷是空からもらった洋服姿で獵銃をかまえた写真に、返礼として、「丸木にて写し、バットと球とをもって運動家のごとく写せし」写真を手紙をそえて送った。手紙の中で、彼は、是空の風流な写真に対して「なるたけ野暮に無意気に親なかせ的に撮影いたし候」と書き、「恋しらぬ猫のふり也球あそび」と歌って、「能球<sup>のぼる</sup> 拜」としている。どこまでもユーモア感覚を忘れていない。

### 13.

雅号を沢山用いた子規は、次のように述べている。

自らいやに思いしゆえ、いっそ字を「子升」とせんかと考えいたり 「升<sup>のぼる</sup>」は余の俗称なり。しかるに去歳春喀血せしより「子規」と号するゆえ、自然と字にも通いてその後は友人も子規と書するに至れり、今日余の用ゆる号は左 (=下記一筆者注) の如し (上段は普通に用ゆるもの、下段は稀<sup>まれ</sup>に用ゆるものなり)

虚無僧 こむそろう	色身情仏	馬骨生	迂歌連達磨 うかれだるま	蕪翠 ぶすい	莞爾生 かんじせい	沐猴冠者 もっこうかんじゃ	盜花	野暮流	秋風落日舎主人	癩祭魚夫 だらさい	子規 （音にても読み また訓にても使う）	丈鬼 じょうき	常規凡夫 ほんぶ
都子規	野球	情鬼凡夫	有耶無耶漫士	浮世夢之助	披襟生	四国仙人	蕉尾道人	痴夢情史	放浪子	冷笑居士	婦嬰 じょうき	真棹家 まさおか	

なおこのほかに種々の雅名ありしが、少し使用せしもあり また全く書きしことなきもあり そのおもなるは「饜飜居士」「僚凡狂子」「青考亭丈基」「裏棚舎夕顔」「薄紫」「蒲柳病夫」「病鶴瘦士」「糶鶴病夫」「無縁痴仏」「丈魔痴仏」「舎蚊無二仏」「痴肉団子」「仙台萩之丞」「無可有洲主人」「八釜四九」「面読斎」など数え尽くすべからず

『筆まかせ』

子規にはその他にも、「一橋外史」「猿楽坊主」「馬骨生」などもあった。

雅号は、とりわけ明治期の文人には大切なものだったのであろうが、子規の場合は、その度合が突出している。これもユーモア感覚にあふれた彼の一面だった。

#### 14.

子規は、「ベースボールという遊戯だけは通例の人間よりもすきで、餓鬼になってもやろうと思っています 地獄にもやはり広い場所がありますか 伺いたくございます」（『筆まかせ』）とまで言うほどベースボールに熱中した。元来、彼は、運動をあれこれやったわけではないが、無邪気で活発、体格もよかったので、テニスやベースボールを好んだ。特にベースボールは得意で、キャッチャーをよくやっていた（『子規こそわがいのち』）。その子規が松山で初めてベースボールをやったのは、明治20年7月30日だという。道後公園で勝田主計とやった。明治22年の夏に松山に帰省する子規に河東鍛が弟の碧梧桐にとボール並びにバットを託した。そして子規は、碧梧桐にキャッチボールを教えた。また明治23年、子規は、松山の練浜場で若者たちとベースボールを行なっている。虚子がこれを見ていて、子規から「失敬、となんとなく人の心を惹きつけるような声で言われた」と記している（『子規博だより』VOL. 21-2）。虚子は、一方で、松山にベースボールを最初に伝えたのは、子規ではなく、松山中学でアメリカ人英語教師から教えられた、とも言っている。

る（『子規こそわがいのち』）。

ベースボールや俳句の活動に見られるように、子規は多くの友人たち、弟子たちと交流した。ベースボールの試合や俳句会、歌会、文章会などの共同学習、グループ活動、チームワークを通じてである。彼は天性の人を励ます能力を有していた（『正岡子規の世界』）。彼は松山中学生の時、既に「五友の会」を作っていたのである。五友とは、子規、竹村鍛、三並良、大田正躬、森知之である。文章会は後年の「山会」である。子規庵の歌会は特に有名である。これは明治31年3月25日に始められている。メンバーは碧梧桐、虚子、福田把栗、石井露月、竹村秋竹、梅沢墨水らであった。俳人たちである（『正岡子規の世界』）。因みに、子規は、友人評が得意で、たとえば秋山真之を「剛友」、勝田主計を「郷友」、夏目漱石を「畏友」、新海非風を「直友」、竹村鍛を「敬友」、柳原正を「文友」、…などと呼んでいる。

子規の死去した後、いわゆる「子規山脈」と呼べる多勢の後継者たちが活躍を続ける。虚子の『ホトトギス』、伊藤左千夫、長塚節、蕨真たちの『馬酔木』、伊藤左千夫、斎藤茂吉の『阿羅々木』などがその拠所となったのである。

子規が仲間や弟子たちと志した文学革新は、俳句及び短歌の革新、そして写生文の提唱である。子規は与謝蕪村を称揚し、かつ「俳句」の道を開いた。また、『日本』で連載した「歌よみに與ふる書」で短歌革新の口火を切った。彼は明治33年に『日本』で「和事文」として写生文を唱導し、同年、文章会「山会」も創めた。

## 15.

子規は楽天的で、物事に積極果敢な人間だった。確かに陽性の松山人気質も受け継いでいた。彼は活力や生命力にあふれていた。越智良二氏は、子規について、ハイカラで新奇を好み、彼なりのダンディズムを持っていた、そしてそうしたハイカラ趣味が文学の革新や野球熱愛につながった、と説明している（『子規こそわがいのち』）。

子規の生きた頃、日本は明治期の文明開化、欧米文化への憧れなどの精神的、文化的背景を有していた。母方の祖父大原観山に幼少時教えを受けて以来、松山や東京で重ねた学問的研鑽に後押しされた彼は、持ち前の強烈な個性、即ち物事に対する強い好奇心、積極的な取り組み姿勢、決断力や行動力、情熱などをもって、重病にさいなまれながらも、短い生涯を精一杯に生き抜いた。

彼は家族や一族の支援を受けながら、同時にすぐれた師たち、友人たち、弟子たちと交わった。彼らの支援や友情、刺激は子規にとり何よりの宝だった。また彼には友人たちを弟子たちを引き付ける豊かな人間的魅力があり、かつ組織力や指導力もあった。リーダーシップを取ってのグループ活動にその力を発揮した。孤高の天才というよりも、他に心を開いたオープンなありようが、そのすぐれた作句力、文章力そして積極的な人間力とともに多くの人材を呼び寄せ、引き寄せた。若くして悲劇的大病に見舞われ、肉体的、精神的葛藤にさいなまれたが、残された時間的制約の中で、いわば死に急いだ面があったかも知れない。他方、実践精神とユーモア感覚は、生涯失うことがなかった。

子規はこのような諸背景の下、俳句（文学）革新とベースボール活動に邁進したのだが、文学は無論のこと、ベースボールに予想以上に打ち込んだわけである。そして両者の出るところは彼の内部において同じところ、同じ衝動、同じ情熱にあったと思われる。

子規はベースボールを非常に合理的、論理的に理解している。そして持ち前の文学力、文章表現力によって明解に解説、紹介してみせた。彼自身も、グラウンドでベースボールをよくした（上手だった）。更に友人たちにやり方を教えた。ともに試合をした。

元来運動をしなかった子規がベースボールに熱心に取り組んだのには、新しいものに対する好奇心が強かったことがあるが、健康志向もあったかもしれない。そして、何よりもこの新競技に対する彼の本能的な使命感のようなものがあったのであろう。

その結果は、我々が今日の隆盛を見るに至っている。日本ベースボール史上における子規の果たした役割は、非常に大きいと言わねばならない。

アメリカから来た新しいベースボールの合理的なルールや共同活動性（共同作業性）は、子規の体質に極めて合致していたと言える。それは一つの合理的な完結した小宇宙を構成するスポーツであり、そこには変幻自在性も内包されている。これは俳句や和歌の世界にも通じるものなのであろう。

そして子規の致命的な病弱体質が、逆説的にも彼をしてこの新奇なスポーツに一層献身させ、それに対する熱意や使命感を燃やさせたように思えてならない。